

光岡敬齋翁功績碑

結城市結城195（健田須賀神社内）

J R水戸線の結城駅より北へ約500メートルいくと、健田須賀神社があります。その参道左手にあるのが、「光岡敬齋翁功績碑」といわれる記念碑です。「敬齋」は号で、通称、「多治見」と呼ばれています。

光岡多治見は、文政12年（1830）、結城藩士光岡角左衛門の長子として生まれます（1829年生まれという説もあります）。幼いころから勉学に励み、9歳で結城藩の藩校である「兼壽館」に入學しました。その後、水戸の郊外に加倉井砂山が開いた「日新塾」に学びます。「日新塾」はその規模や内容ともに他に抜きでた北関東随一の私塾でした。後に水戸藩の天狗諸生の内乱の中心人物であった藤田小四郎（水戸藩第9代藩主徳川斉昭の片腕ともいわれた藤田東湖の四男）も学んだことでも知られています。

多治見は「日新塾」で塾長にもなり、その後、帰郷し、「兼壽館」の世話役や教授にもなりました。元治元年（1864）におきた天狗諸生の内乱時には、天狗党から「天狗党の味方にならず、軍資金の提供をしなければ、結城市街を焼く」という脅しに対し、町奉行兼郡奉行であった多治見は、天狗党の人たちを説得し、結城の町を守りました。さらに、慶応4年（1868）におきた戊辰戦争では、多治見は「用人」という立場で結城藩を恭順派に向かわせ、「結城藩」の存続に力を尽くしました。



廃藩置県の際、結城藩は結城県となり、結城藩第11代藩主であった水野勝寛が知藩事となると、そのもとで、多治見は「権大参事」という重要な役職につくことになります。その後、私塾「知新館」を開き、藩外の人や武士以外の人たちの入学を認めたため、遠近から500人もの人々が学んだと言われています。そして、明治6年（1873）には、結城小学校の嘱託教師、明治13年（1880）には結城町の学務委員となり教育に関わりました。明治26年（1893）には、健田須賀神社の社司に任じられました。多治見は大正3年（1914）に亡くなりますが、生前の明治33年（1900）に門人や多治見所縁の人たちの手によって功績碑が建てられました。

茨城教育 第八七四号

令和六年二月二十日発行

編集責任者 鹿志村 則男

発行人 鹿志村 則男

発行所 一燈閣茨城県教育会

水戸市見和 一三五六一

電話 〇二九—三二—一七四七

印刷所 有限会社山田軽印刷所